Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第415号
2021年9月号
bestopia.jp
パリ通信
第117号

パリ通信　第117号

新学期・日本の留学生をアテンド

9月はフランスの新学期。学校だけでなく、スポーツクラブ、文化施設の年間会員申込みなど新たな一年の活動を始める時期だ。「衛生パスポート」(ワクチン2回接種終了または72時間以内のPCR検査陰性証明)があればコロナ禍以前に近い生活ができるようになった。
フランスも日本もワクチン接種が進み、フランスに留学してくる日本の大学生が少しずつ到着している。長らく中断していた学生ビザがこの夏から発行されるようになり、日本で2回のワクチン接種を終えた学生がパリや地方都市で大学生活を始める。ビザを必要としない90日以内のフランス語学研修、姉妹校での短期ワークショップに参加する大学生もいる。少しずつだが海外留学が再開されたことは喜ばしい。

パリ・オーステルリッツ岸のアジール・フロッタンに関心を持つ日本の大学生を船内に案内した。日本もフランスと同様に対面授業はほとんどなく、当分はオンライン授業が続くそうである。後期授業まで時間があるので日本帰国時の厳しい水際対策にも負けずにフランス入国したと言う学生に日本に戻ってどうするか尋ねた。

「入国時三日間の隔離」(空港近くのホテルやワンルームで蟄居)は逃れようがないので我慢して、空港を出たら電車で帰宅するそうだ。「公共交通機関は利用できないでしょう。私は関空まで家族に車で迎えに来てもらいましたよ。」と言ったら「そんな真面目な人は珍しいです。日本では罰金も法的強制力もないし、オリンピックは強行して、我々には無理なお願いを押し付けるのはなしです。レンタカーで帰宅すると誓約書に記入して電車で帰ります。」
7月には日本入国後連絡が取れなくなった人が700-800人いたそうで、水際対策への対応も結局のところ個人個人の判断と倫理観に集約されるようだ。

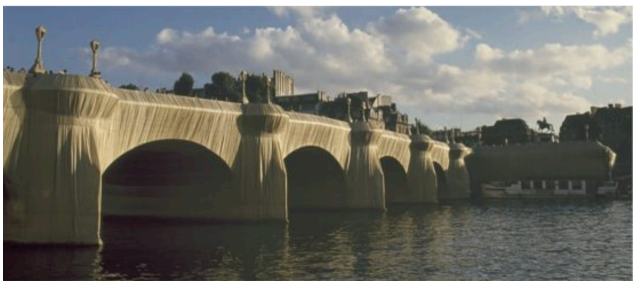
「布で包まれた凱旋門」

コロナ禍との共生の受取り方も個人差があるとは言え、ワクチン接種のおかげで文化活動が戻りつつあるのは幸いだ。9月18・19日は「ヨーロッパ文化遺産の日」、通常は一般公開されない文化財を見ることができる。その「文化遺産の日」を前に「布で包まれた凱旋

門」に気付かされたことがある。

1805年オーステルリッツの闘いに勝利したナポレオンが凱旋を祝して1806年建造した「凱旋門」はパリを代表する文化遺産だ。その「凱旋門」を淡い銀色のリサイクル・ポリプロピレン製の布で包帯の様にグルグル巻きにした。昨年ニューヨークで亡くなったアーチスト、クリスト(1935-2020)と同じく現代アーチストの妻ジャンヌ=クロード(1935-2009)の遺作である。
ブルガリア生まれのクリストは首都ソフィアのボザールで学ぶ。1944年ソビエト軍がブルガリアに侵入し、プロパガンダに利用される芸術から逃れるため、1956年ウイーン、1958年パリに移住する。

1985年にはパリの「ポン・ヌフ」を包んだ。
偶然パリにいて、グルグル巻きの橋は印象的で綺麗だと思ったが、その意味を考えることはなかった。
クリストとジャンヌ=クロードは「ポン・ヌフ」だけでなく、アメリカ合衆国コロラド州のサフラン色のヴァレー・カーテン(1972年作)、ベリリンの国会議事堂(1995年作)など包む芸術を展開した。


パリっ子を驚愕させたポンヌフ橋を乳白色の布で梱包した作品は、1985年9月16日〜22日まで登場。《The Pont-

芸術とは

遺作となった「凱旋門」を見て、芸術が何の役に立つのかという疑問が湧いた。エトワール広場の真ん中に200年以上も君臨している凱旋門はそこにあって然るべき、揺るぎない存在だ。それを包んで隠してしまう、見えなくしてしまう。
25.000㎡という巨大な表面積をクレーンを使って140名の手で包む。自分の作品を売却して10億円を超える巨額な費用を使っている。しかも9月13日から包み始め、3週間後には取り外される。芸術とは何かと思う。ソビエト軍の支配下を生きたクリストが芸術の役割を考えない筈はない。「我々の作品は自由である。誰にも購入できないし、誰にも所有されない。(ユマニテ紙) 」包まれて存在が見えなくなることで初めて見ることを理解する。目に見えるものも見えないものも明日は無くなる。残すことではなく、残さないことを目指した芸術があることに気付かされた。（古賀順子記）

参考:「ポン　ヌフ」の位置（編者記）

1区と6区を結ぶポンヌフ

セーヌ川を跨ぐ2つの橋